岡田甫校訂

誹風柳多留全集十一

自一三五篇　至一五〇篇

三省堂刊

誹風　柳多留全集　十一

定価　五八〇〇円

昭和五十三年七月十五日　第一刷　印刷
昭和五十三年八月　一日　第一刷　発行

校訂者　岡田　甫（おかだ・はじめ）

発行者　株式会社　三省堂　代表者　上野久徳

発行所　株式会社　三省堂
〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話　東京（〇三）二九三—三四四一（代）
振替口座　東京六—五四三〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

〈柳多留11・336pp.〉

©1978 by Hajime Okada

誹風 柳多留全集 十一

目次

誹風柳多留

百三十五篇……一
百三十六篇……三三
百三十七篇……四五
百三十八篇……六七
百三十九篇……九一
百四十篇……一一五
百四十一篇……一三三

百四十二篇……一五三
百四十三篇……一七七
百四十四篇……一九七
百四十五篇……二二五
百四十六篇……二三五
百四十七篇……二五九
百四十八篇……二七七
百四十九篇……二九七
百五十篇……三二五

第十一巻編集メモ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柳多留

百三十五篇

天保五午年刊

川柳宗匠撰　百卅五編

裲襠多留

東都市谷書肆奎文閣

（表紙見返しの扉）

天保四歳　十九麿居士
巳十二月六日　柳糸居士　追善會

巨眼評　百卅五篇

催主　今人　今山

寶藏の經も月日の鼠喰　稲丸
八嶋落御座船の艪も蟹の足　祖山
大般若敵のまた來る跡祈禱　三輔
錆ぬ名を世にあらはした墓の劔　扇松
心中の虫ハ獅子嶋門徒なり　株木
名山に身ハ寄木の物かたり　千之

……【一三五・1】（1ト）

堺海道横に行く蟹間寺　株木
僧正のしひれ京てハ大さわき　哥織
蓮生か質ハ末世に名を流し　玉守
鳥佛師木彫も羽根かはへて飛　株木
愁歎ハ杉本ぬれハ左中將　今人
殺ゞ度佛意に叶ふ腹の虫　如扇
むね打か利て山葵に泣出され　今人
糸卷に借りられる手ハ二見潟　竹子
なせ鳴か立てはあわれと無雅な奴　三輔

八宗へ手向樒の木も坊主　百々爺　稲丸
白骨のみそ殘りけりうしほ平　玉守　竹賀
すかしへは三分六部は紙帳へ寐　錦糸　錦重
のろわれるいわれを聞ば穴二ッ　松哥　左棟
經堂へ虫除にちる銀杏の葉　千之　醜郎
八朔の亡者脱衣婆供につれ　竹賀　巨眼
附文のそは弁天と濡佛　[redacted]（一五三・4、竹賀）　里水
女の淺黄覗てる樂屋風呂　株木　三朝
いか栗も百日も出る堀の内　祖山　巨眼

……【一三五・2】（2ト）

つよい雷俗か坊主を着て歩行　花童　一蝶の便り墨繪と嶋干物
團扇の加役ちり取て骨か折　小亀　小野寺て穴目吟味の双紙論
間男ハこう重子てと賃粉切　如扇　朱硯の筆撫子のあした咲
好キな猫赤子の尻へ斑か出來　今人　鮎賣た財布の咽も鵜飼〆
寺の垣いほか信女を〆ている　正八　野さらしの縫に女良の骨を見セ
大尾だんまりの幕切レ二人リ汗をふき　登志丸　百八の豪傑珠數屋の轆轤錐
竹子評　元舩の景色珠數屋の轆轤錐
壽の補藥印籠詰メに鉢植木　如扇　羊蓼（蓼？）の拍子木膳の引道具
晝の蚊に燒筆くへる貞か妻　株木　忍ヲ字ハかねて刄の下ダ心

……【一三五・3】（3ト）

朧豆腐に三日月ハ柚の口　仝　稲丸
襟足も鋏鑰山に陰（間）広塗リ　木亊　竹賀
普賢の衰微象牙迄御手か入　松哥　錦重
新川の書家濡孤に握り墨　左棟　左棟
中剃の池におさ舟艪のしのき　木亊（卯）（一三四・13、木）　醜郎
木魚のひよめき年明ケのやうに（はず）兀　稲丸　巨眼
語る鳴渡（門）に切（レ）糸かうつを卷（一二八）　竹賀（賀）（一二八・9、竹賀）　里水
美しさ普門品第二十軒　花童（安七・梅2）（六二・5、マイダ）　三朝
附文の側弁天と濡佛　[redacted]（2）　巨眼

揚蓋の打鍵指をチョイとまけ　團石
淺草のお職身請は宮戸川　今人
五風十雨の門番ハ妙智力　夢輔
送り舟嶋の横手を佃ふし　丸竜
網手猪口阿漕につのる裏櫓　升丸
白蓮ハ玉兎と見へる月の松　[redacted]
布目瓦にけんほうの初霰　木畊
甍ならへし此藏は君か舩　左棟
砂糖湯の茶碗へ響く調子笛　木畊
……【一三五・4】（4ト）

大尾
呼文にヒョイと顔出ス有馬筆　千之

番外

分レても信か極惹の神儒佛　千之
勅免も又なか〳〵の名哥也　三輔
狆（紳）に菓子主の危急を片はつし　高麗
招く日も果ハかたむく西の海　千之
いさ折ん手向の花に首を曲ヶ　扇橋
風流も今日香花と變る机（札？）　玉守
濡乙鳥傘尋るか智恩院　佃

惡も皆善に歸りし切の幕　三朝（五〇・26、梁圭）
翌日知らぬ文梅（入？）に若葉の桐丸太　千之

如扇評

神國も菩薩に命助ヶられ　稚竜
六字にも七字にも增慈悲の二字　三輔
消へて目の覺るハ親と抱火鉢　松丸
世の罪を秤に懸る兩替屋　仝
無緣にも天に依怙無き草の露　東子
聞流ス耳に心の垢ハ無し　[redacted]
……【一三五・5】（5ト）

月星をまたいて通る水溜り　花童
御役柄紋迄丸をつき合セ　小龜
鉄釘も錆たる医者のなくり書　左棟
西方の大関らしい釈迦ヶ嶽　松丸
斷食でする御利益の居催促　千之
戀無常三枚肩に四枚肩　錦糸
仕合セな小僧子にして旦那にし　今人
大黑になるハ嫌たと櫻姫　赤子
月も日も位牌に殘ス西の空　波千丸

觀すれは寶も反古のいろは藏　松丸
燈明に立引の有高野山　小龜
虹を見て孝子ハ墓へ暇乞　扇松
いろ〳〵な啼聲を聞涅槃像　和國
かし無くし知レぬ目出度ィ藥鍋　こまめ
極樂の道もレコたと佛の手　里鳥
大般若らしく煙草屋(きり)冬を吹　獨歩
清盛の病氣見舞に龍吐水　和國
羽生村智識ハ珠數ヘ玉の汗　玉守
……【一三五・6】(6ト)

幽灵の裾牡丹餅をちきるやう　文和
極樂の町錫杖て御成觸　十九丸
うぬ今に手打にするそ蕎麥の花　山升
木食ハ屁とも思ぬ米相場　千之
夫レ地獄(八三)遠きにあらす隣裏　花童(大三・9、雨且)
芦原(大尾)のしたゝり蓮の露と消　稲丸(七八・238、手枕)(八三・72、一之)

登志丸評

靈山の麓蓮池佛店　吐空
容顏を姑の崩ス美しさ　山石

遣ッて減らぬ千金ハ師の記念　仝
本諷(魂?)ハ誰か眼鏡にも能く叶ィ　仝
花娵も引そ煩ふ菖蒲形　窓雨
建立の繪圖ハ和尙の蜃氣樓　花童
竹を出た美人五人にふしを言　巨眼
元船の景色珠數屋の轤轆(轆轤)錐　里水(3)
寶船來る度に寄る老の浪　稲丸
連哥師の金箔(ヤ)附は牛に乘　巨眼
打數ハ花に嵐の惣模樣　扇橋(三六・37、木葉)
……【一三五・7】(7)

さめやすき榮花の夢も蝶の紋　松哥
生マ海糠(あみ)に蝿大鵬の氣てとまり　如雪
秋風を孕ムて寄ぬ竹婦人　心山
謠本文字の間に鼠屎　竹賀
漠不怪(怪?)とふたお夢ハいけますか　蛙柳
日に增しに露氣(て)をふくむ草束　堅丸(一〇〇・144、堅丸)
鬼の眼に泪片腕もき取られ　栁糸
中剃の池長サ(ど)舟に艪(3)のしのき　木所(3)
押物ハ笠輪五点の兀天窓(はげあたま)　升丸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神に依怙無し附髪(髮?)ンて拜ス宮　三朝
舩頭の足音を聞(ト)(二二三)くいゝ涼ミ(二二〇)　如扇(二二三・二二〇・1413)
有難イ和尚忰に生キ別レ　稲丸
三階に家無し新造廻し部屋　仝
善根の種を彼岸に母ハ蒔　花山
目の下の瘤に泪は腰を懸　榮川
咥と餅つく覺悟する年の暮　如扇
引舟ハこッちの洲たと河童言　[redacted]
蛸角力八ッに渡ッて六ッに組　十九丸
……【一三五・8】(8)

大尾
蛤も紅猪口になる初月見　花山

堅丸評

釈迦弥陀の慈悲ハ衆生の二ヲ柱　玉守
大海智祖師ハ弘誓の渡し守　如扇
分ても信か極意の神儒佛(4)　千之(4)
善根ハ我か行先の道普請　榮川
消へて目の覺るハ親と抱火鉢　松丸(5)
けしくて日和の替る星月夜　竹賀
鯲踏(どじょう)ム足取て舞ふ鷺仁右衛門　今人

後悔か先達ヲ父母の墓へ詫　百々爺
和らかな者程人の口に合ひ　海魚
鉄槍を忘レて石の時參り　和國
一ト筋の心て織た蓮の糸　如雪
木魚のひよめき年明ケ(3)のやうに兀(はげ)　稲丸(3)
板一重上ハ地獄の干鰯(ほしか)舟　松丸
團扇の加役塵取て骨か折　小龜(2)
疱瘡の達广不首尾て土左衞門　赤子
馴染た花に忠度一首遣り　竹賀
……【一三五・9】(9ト)

桶屋の三藏猿坊の籠を〆　祖山
御十念米舂猿の身ふりをし　花童
火鉢にてこうそりをする活炭團　文和
寺の箔(ヤン)はかし梵妻顔を塗リ　花童
硝子の幽灵を吹しやほん寶　三箱
序に出まするハ御先祖と梓神子　今人
風流な手向師匠へ枯尾花　山石
千早の綾釣り南木か作者也　仝
知らぬか佛素人の氣て地獄　祖山

居酒見世困るハ錢かなき上戸　今人
飯櫃も土用を凌くあしろ笠　種蒔
梨壺の君と小町ハ仇名され　巨眼
早松を入レて薄葛の味しを出し　木弁
大尾 招く日も果はかたむく西の海　千之（4）

亀丸代撰 貞亀評

御灵拜幣を手向紅葉山　左棟
信も又心ゑ出て眞ッに歸す　夢輔
黑髪へ艶增ス九四の御祭礼　麹丸
……【一三五・10】（10ト）

見る胸もさける泪の嶋干物　扇松
聞流ス耳に心の垢ハ無し　[redacted]（5）
布目瓦にけんほうの初霰　木弁（4）
丑寅のかたに鬼打豆大師　松哥
三歳ハ爰に袞風と松ヶ岡　花童
消へて目の覺るハ親と抱火鉢　松丸（5）
珠數玉か何ッそと問へば十團子　佃
眞ッ青な塔婆てかこふ仁王門　野萩
仕合な小僧子にして旦那にし（セ（5））　今人（5）

勘作か浮ム瀨も有伊和川　升丸
きやうけへってん賣豆やと髪結床　三朝
門前の石屋ならわぬ文字を彫　左棟
枕飯からもふこわく娘ハ焚　祖山
茶飯か出來た押入を片附ろ　三朝
柘榴口引手を下タへ横に附ケ　如扇
辷り落百足ハ谷へ百ん這　烏水
摺粉木の中落を持閻魔王　柳糸
目の下の瘤に泪は腰をかけ　榮川（8）
……【一三五・11】（11ト）

思ひ内にあれは顔へ出る面皰（ニキビ）　十九丸
お局の恪氣跟（カハト）に角かはへ　稲丸
我か物と思へはかなし瘡のレコ　千之
名を忘レたのてあはたか用に立　十九丸（一六・37）
戒名を忘レ南無かゝァ〳〵　堅丸
爰ハまた生キてこさると女房泣　角丸（末二・16）
死水を取ッて茶臼に葬らわれ　木弁
大尾 蟻か來て登る野屎の榮螺堂　竹賀
呪咀（のろ）われるいわれを聞ハ穴二ッ　松哥（2）

和国評

(マヽ)
豢平ッ刀も珠數も懸る御代　團石
松の御代調度當ッた千年忌　堅丸
鱚の拜領やゝあつて魚鳥留　三輔
蛇も鱗を震ふ高野のつむし風　麹丸
目出度ッハ先祖代々附届　今人
鳥さしにおんあほきやァハ間に合す　左棟
あつい慈悲かた身に殘る灸の跡　松丸
猪口の中佛の根太の胡麻よこし　今人
……【一三五・12】(12ト)

佛法の最初の額に字か余り　團石
目出(度脱?)サハ念佛講の跡まわり　堅丸
頓死をしたて譽られる獨り者　三輔
道成寺(轆轤)ッ(一一五)轆轤尻て鐘を卷キ(一一五)　麹丸
茶と酒を分る土瓶の力紙　今人
こくらかる胸てハ出來ぬ蓮の糸　左棟
きやうかくの蓮(花)化に座した胸佛　松丸
鑓よ馬よと草市の時の聲(に(九七)(一〇五))　今人
匕を投鍬をなけるとモァ佛　子の手足延ス氣でとく後家の帶
法字て操(繰)リ出ス大詰の大般若　團石
ふちいかして仕舞へと亡者大喧嘩　種丸
極樂を出て傾城はうかむなり　花山
一筋の枝も榮へる麻布山　心山
精進物のかなしさハ呑メやせん　竹丸
早松を入レて薄葛の味じを出し　今人
金つくて折レぬ女郎の足の指　木卵(10)
淺草の御職身請は宮戸川　祖山
……【一三五・13】(13ト)　今人(4)

追善の度古人の句生キ返り　團石
鮓も素語り作彫の羅漢めき　蛙柳
聟はまた幽灵抔を見ぬ男　三箱
見て臭し摺る時さそや番附は(大尾)　仝
紫山

團石評

高枕昔しは檜木今は杢　松哥
手向水呑ッた茶碗もおはり燒　[redacted]
神の名を笠に着て越ス所ゝの関　三箱
葉斗りな商賣をする寺の門

[redacted](一一五・14、木賀)
乙ァ
巨眼
こまめ
麹丸
角丸(九七・4、二豊)(一〇五・40、二豊)
三箱

迎ィ僧是ハ亡者の猿太彦(マヽ)　巨眼
旅人は豆か出來ると馬を買　竹惣
褌を取りに雷り唐へおち　左棟
鰻(マヽ)の錢なむさん取ッぬ忌中札　蛙栁
大名の門へたふさをたゝき附　栁糸
鬼子母神四文くんなに御困り(に)(一三四)　和國
魚の骨家根屋ハ立テぬ口の馴　左棟
香爐獅子蹴落して買ふ古鉄や　錦糸
取たほうから泪くむ念佛講　花童
……【一三五・14】(14ト)

強ィ雨俗(置)(2)か坊主を着て歩行　仝
白布の脚半て遠ィ國へ行　巨眼
龜の耳へ念佛ホチヤンと放し　三輔
親も食ィ子も喰ッている芋酒屋　海魚
念仏ハ冥途の道の旅用金　竹惣
かもし屋の看板髭の廻し干　麹丸
本願の他力で地形踏かため　榮川
手入らすて死のか本の新ら佛(大尾)　角丸
二代目　栁　糸　評

經師屋の壁にあみたの後ロ向　和國
無一物忠に命のきれ表具　竹子
琴程に評をしらへる糸栁　團石
つゝられに風雅は殘る糸栁　川鳥
御画像を經師裏から珠數て摺　■へ
提灯も經師も同し法リの友　松丸
柳の糸て操(繰)り返す若緑　乙テ
開目に栁糸十九丸うきくし　登志丸
經師下手屎八宗の尻か來る　夢輔
……【一三五・15】(15ト)

麻布連松も柳も十九若世　百々爺
俄鬼(鏡)道の表具斷食堂へ懸　烏水
お稜(咬)ィと經の枝折に青表紙　山石
經師屋へ張り句手向のはけついで　三箱
幽灵ハ栁の糸て釣たやう　野萩
十九丸と栁糸ハ馬鹿たナテかゝテ　團石
栁の糸て結ッたる十九な會　木亭
杉と栁を極樂の門へ植　玉守
勢ィの無ィハ土瓶の力紙　三箱

經師屋ハ辞世へ鬼(はけ)の泪雨
經師屋へ鑄掛を頼む鍋冠
かんいしくとく(ぐわんに)(38)經師屋(表具や)ハ珠數(三二)を出し
麻布の中て蓮生ハ柳糸居士
無常の風になひかれる糸柳
生ィ茂る古き柳の九十九髪
大尾関寺の柳も雪に九十九髪

榮川評

西海の波に漂ふ竜の御衣
……【一三五・16】(16ト)
凱陣に飛立ッ思ひ夜ルの鶴
早桶へ君ハ死身てかくれんほう
いろ〳〵な泣聲を聞く涅槃(6)像
火車に召ス時ハ三日月水の印ン
遣ッても腕へ千金師(7)のかたみ
二度迄も耳をふさいて勅を辞し
聞流ス耳に心の垢ハ無し
招く日も果ハかたむく西の海
糸巻に借られる手ハ二タ見潟

和國
[redacted]
三朝(三二・38、霞朝)
株木
[redacted]
海魚
扇松
左棟
木野
牛車
和國(6)
花山
山石(7)
野萩
[redacted](5)
千之(4)(10)
竹子(1)

愛敬ハ手にも取られぬ子の宝
花なれはこそ高野にも女郎花
我顔を拜ム神居の立テ鏡
戒名も無腰てハ居ぬ忠の墓
十万へ百万石も一人リ旅
掛取の顔鬼と見る火の車
半分ハ枕(ソ)(六二)へわける五十年
神の名を笠に着て越ス所ミの関
浮キ葉の蓮に文鎭の雨蓑
……【一三五・17】(17ト)
組討の側にけろりと馬二疋
月も日も位牌に殘し西(ス)(5)の空
塩辛て一戒破る閻广王
猫の魔かさして息子ハ狂ィ出し
角かくし心の鬼のぼうしばり
佛罰を恐レ六部ハ屁をこらへ
腰縄て御目見へに出る放し龜
いゝ年シてへのこほしかる女人堂
俎板へ乗て男の骨を見せ

今人
角丸(三六・37、其諧)(七七・253、手枕)
團石
三朝
如扇
百々爺
高麗(六二・24、霞川)(拾九・11)
今人(13)
錦重
ヤナキ
波千丸(5)
玉守
乙テ
和國
花童
如扇
角丸
三輔

河童の身投山へ行ケく　種蒔
大尾子の手足延ス氣て解後家の帶　團石(13)

二代目十九麿評

上品之部

神國も菩薩て命助ケられ(5)　稚竜(5)
やしなふハ嚙ンて含メた恩返し　升丸
佐兵衛か產聲天然と物あわれ　松丸
名有僧皆佛師屋を兼帶し　堅丸
極樂の水ハ紫雲の色に合ィ　松哥
……【一三五・18】(18ト)

死人瓶ろくに藥も廻りかね　野萩
親の日に坊主にするハ庭の菊　登志丸
慈悲の門施ス米の羅生門　玉守
仮名美しき尼寺の法度書　角丸
夢を見に生れた娑婆のあつけなさ　文和

同中品之部

孝行な息子心に三ッの猿　巨眼
つく芋ハ劔の山を引つられ　文和
消へて目の覺るハ親と抱火鉢　松丸(5)(8)

眞ッ青な塔婆て構ふ(10)仁王門　野萩(10)
煙草屋ハ見本に玉へ疵を付　甲守
腮も齒も取レて流るゝ下駄左衛門　烏水
親猿か死ンてお木から落し也　近賀
葬禮の座敷を持ッハ奴なり　登志丸
枕飯から最ふこわく嫐は焚　祖山(11)
あつく無しぬるく無しァ、なんまみた　玉守

同下品之部

ホィ桶くと六道の辻て言　烏水
……【一三五・19】(19ト)

戒名を忘レ南無かゝァく　堅丸(11)
白ィ齒ハ見せねと母ハこわからす　小龜
ろくろ首化ケる時にハおへるやう　二世柳糸
舌の有雀をはなす法リの爲　竹賀
釣竿の看板を出スあら佛　種蒔
血の付ィた文の嬉しさおそろしさ　赤子
下手な医者病家の方て匕を投　松哥
我物と思へはかるしせん氣持　高麗(一三四・12、高麗)
小便所前に提てる辻羅かん　祖山

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com